
あの日

手塚昂人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あの日

【Nコード】

N8743B

【作者名】

手塚昂人

【あらすじ】

運命を変えたトロピカルランドでの出来事。「黒の組織」に飲まれた試作段階の毒薬APT4869によって身体が縮んでしまった工藤新一は、自らの試練に立ち向かうべく新たな人生をスタートさせる。高校生探偵として名声を得ていた工藤新一は、変わらぬ日々を幼馴染の毛利蘭や親友の鈴木園子と共に送っていた。蘭は新一に想いを寄せているものの、内気な性格と相手を尊重する優しさが災いしてか、中々本心を言い出せない。新一も同様だったが、蘭への想いとは別に自身の心中にある見えない壁を感じていた。それ

は一体？そして、その正体に気がついた園子の心もまた・あの運命の日の直前、工藤新一とその周囲に起きた小さな出来事が今、明かされる。

第一話

SIDE Shinichi

「・・・たく、あいつの気持ちだけは、わからねー！」
静まり返った校舎の屋上にばやき声がむなく消えていく。

校舎の屋上にある小さな物置小屋・

その小屋の裏には小さな足がかりがあつて、屋根の上に上がれるように

なっていた。そのことを知っているのは、今そこで寝そべっている男一人である。

男の名は工藤新一。

世間に名高い高校生探偵、日本警察の今や救世主とまでもてはやされる

工藤新一であつたが、それはあくまでも”事件”あつてのもの種・
ことが女心・しかも自分の想い人とあつては、抜群の推理力も洞察力

も全く働かない。まあ使う脳の部位が違うのだからこれは仕方ない
ことかもしれない。あつたが・

「大体、なんでアイツあんな言い方しやがるんだっつーの・・・」

新一の脳裏に今朝の蘭の言葉が巡っていた。

『女の子にデレデレするのはイイけどちゃんと本命1本に絞りなさいよ』

「本命だったって・・・！」

新一の気持ちは今更絞る必要もない筈だった・

毛利蘭・新一にとっては幼馴染の仲の良い親友だ。その後、現在の高校生に

至るまでずっと傍で成長してきた心許せる異性でもある。新一のその明晰な頭脳

から溢れる知性とサッカーで鍛えた身体から来るバランスの取れた容姿が、同級生

の憧れの的であるように、一方の蘭も生まれついでのもので、決して取り作ることの

できない慈愛に満ちた心を、空手で鍛えた心身がそれを更に強く包み、内面の凛と

した美しさを際立たせていた。性格的に新一は目立つことが好きで、高校生探偵と

して既に世間にも大きな知名度を持つだけでなく、その事で自分が周囲に注目され

ていることも自覚していた。毎日のようにかばんや靴箱、ロッカーに届くファン

レターも、そうした新一の自尊心を満足させる現象でもあった。反面、蘭はわりと

内行的な性格であり、どちらかというと目立つようなことを避けていた。ただ、

そんな引つ込み思案な自分への反発もあるのだろう。空手に打ち込むのも自分の弱さ

と向き合う為でもあり、また無意識のうちに新一のような社交的な性質に憧れる

気持ちもあった。そしてもう一人、二人に共通の親友でもあり、特に蘭とは無二の友と

自他共に認める同級生の鈴木園子も、蘭にとってはそんな自分には無いものを持っている、

かけがえの無い存在であった。園子は日本でも有数の資産家である鈴木財閥の令嬢

ではあるが、そうした親の威光をひけらかす様なこともなく、天然とも言える明るさ

と清潔感に満ちたさっぱりとした性格で、生まれついてのお嬢様然とした外見の気品も、

周囲とのバランスを取るために、ちょっと荒っぽい言動でわざとしくすませるような

気遣いを自然にこなしているところがあつた。園子のそうした心遣いを誰よりも理解

している蘭にとっては、心から頼りになる存在だった。そしてそのことは、蘭を

誰よりも大切に思う新一にとっても好ましいことだった。園子と新一もまた、気軽に

冗談口を叩き合える仲であり、今や三人の仲の良さは周囲の者にとつては誰もが知る

ところであつた。

そんなこんなで特に新一と蘭の仲の良さは周囲の誰が見ても一目瞭然であつたが、

”幼馴染だから・・・”という認識もあり、当の新一にとって手を伸ばせば何時でも届くと

いう”幼馴染”という壁は意外に厚く、そうこうしているうちに時を重ね、とうとう

高校も二年生まできてしまったのである。

「にしても、あいつ人にどうこう言う前に一度くらい手紙の一つでも入れてみるってえの・・・！」

新一にしてみれば、蘭の前でファンレターを見せびらかすのはちょっとしたあてつけである。

名探偵と賞賛される人間にしては、いささか子供じみた心理と言えなくも無いが、そこ

はそれ、幼馴染で気心の知れた蘭のことである、人前では名探偵然とキザなポーズを

決める新一ではあったが、親しい者にとってはこうしたガキっぽい一面とのギャップも

また好ましいところでもあり、全てを受け止めてくれるからこそその安心感がそうさせている

のかもしれない。とは言え、引っ込み思案でなかなか心の奥を見せない蘭を前にすると、

つい何とか本音を引き出さなくなる新一だった。そのくせ自分からは蘭に告白できずにいる

自分を自覚するのも歯がゆいところではある。ただ、新一は新一なりに本命とそうでない者

にははつきりと一線は引いている積りだった。毎日のように届けられる手紙は、差出人

からすれば、ラブレター同然の内容の筈だが、新一は決してそうは思わなかった。蘭に得意

そうに話す時にもちゃんと”ファンレター”と呼んでいた。だからこそ、当の蘭本人から

そんなことを言われるのはちょっと心外だ！という思いもあったし、同時にそんなこと

をさらりと言つてのける蘭の本心が分からなくなってしまうのだった。

『幼馴染だから仲が良いってだけなのか？恋愛感情にはならねえって事なのか・・・？』

新一達は現在高校二年生・・・来年にはいよいよ大学受験を控える大切な一年となる。

高校生活を満喫できるのも、この辺りが最後だが、ある意味で、事件と捜査が何よりの活力と

信じて疑わない灰色の脳細胞を持つ工藤新一にとっては、一般的な高校生達が楽しんでいる

ような恋愛ごっこには余り興味が湧かない。皮肉な話であるが、新一がもつとそうした普通

の学生であつたなら、蘭との仲ももつと早くに幼馴染から脱出、いや進展していたであろう。

実のところ蘭はいたって普通の女の子であつたから、新一とは違って同学年の子達同様に、

普通に学生生活を楽しみ、恋愛にだって興味はあつた。しかしながら、蘭が幼い頃から見つめ

続けてきた少年は、手足が伸び、頭脳が秀でてきても相も変わらずの”大馬鹿推理之介”で

あつた。そんなわけで蘭はいつの間にか恋愛よりも、親友の園子との友情や空手に打ち込む

少女となっていたのかもしれないが、それは新一のあずかり知らぬところであつた。

「とにかくにも、蘭の本心を知ることだよな・・・」

卓越した推理力と洞察力を駆使したものの、やはり恋愛と事件では使う部位が異なるという

ものである。苦心した割には出てきた結論はお約束なものだった。

「となると・・・蘭の気持ちを知るには・・・やはり!!」

新一の脳裏には、何時も蘭の横で明るい笑顔を振りまいている親友の顔が浮かんでいた。

恋愛と言うよりは捜査みたいなものだ・・そう思うことで、何となく気分が軽くなる新一だった。

第一話（後書き）

心理小説テイストです。遅筆ですがお付き合い願います。

第二話

S i d e R a n a n d S o n o k o

「新一の馬鹿・・・！」

心のつぶやきと共に、小気味良い打撃音が道場に響いた。
毛利蘭にとっては、いつもの稽古ではあるが、キック用サンドバツクの軋みが激しい。

『今日の毛利先輩・・・気合入ってるよね・・・』

『大会が近いからだと思うけど・・・凄いよね！』

『あれなら今度の都大会、優勝は確実だね・・・』

後輩達が隅っこの方で囁いているが、一心にサンドバツクに向かう蘭にはそんな雑音は耳に入らなかった。頭の中には今朝の新一との会話がリフレインしていた。

『みるよ！このファンレターの数！！』

得意そうににやけてみせる新一の顔がまぶたに浮かぶ。

「馬鹿！」

ドシッ！

「馬鹿！！！」

ドゴッ！

「大馬鹿！！！」

ゴシヤッ！！

気合いがのった時にはブロックも粉碎する蘭の打撃力は凄まじい。後輩達には何故かサンドバックが気の毒に思えて仕方なかった。

「いやあゝ気合い入つとるねえ・・・！」道場に張りつめた空気が急にしほむような間延びした声が響いた。思わず力の抜けた蘭が振り返ると道場の入り口に笑顔の似合う親友が立っていた。

「園子！」さっきまでの気合いから、思わず大声が出てしまった。

「ちょ、ちよつと・・・勘弁してよ！私はサンドバックにはなりたくないって・・・」

わざと身をすくめてみせると、園子も、つられて蘭も吹き出した。後輩達もほつと

した思いで、さっきまで殺伐としていた道場内は途端に笑顔で満たされていた。

園子はこうしたさりげない空気のいじり方を心得ていた。勿論、そのうした配慮や

所作が、彼女自身が生まれながらに背負わされてきた財閥令嬢という肩書きと向き

合ってきた結果であると、何となくでも気がついてるのは親友の

蘭だけである。

園子と蘭は無二の親友であるが、それは慈愛と正義感に溢れ涙もろく情に厚い蘭と、

何事にもポジティブで感情表現がストレート、好奇心も旺盛でちょっとお節介なところ

がある園子の絶妙な取り合わせであった。園子は言わずとした鈴木財閥のご令嬢で

あったから、その気になれば取り巻きに囲まれ、異性からのアプローチも引く手数多

の筈だったが、そうした自分を取り巻く環境による恩恵に預かるのは、園子の性格上、

望ましいことではないようだった。だから園子は蘭と四六時中くっついている。蘭の

空手の実力は十分に知られているだけに、ボディガードを兼任しているようなもの

であった。蘭にしても、一緒に暮らしている父親は元刑事で現在は探偵稼業をしており、

故あって両親が別居している以上、子供でありながら、大人としての自覚も持たなければ

ならず、同じ年の子が楽しむような家族団らんや世間並みの遊びに没頭するようなこと

もなく、その意味では特殊な家庭事情だったから、何となく園子の心の底にある”孤独”

にも気がついていて。ようするに二人は気持ちが通い合っていて一緒にいて心地良い

間柄だったのである。蘭は時々、新一ともこんなふうになれたらいいのに・・・と思う

こともあるが、何せ相手は大馬鹿推理之介である。新一の興味は恋愛よりも推理、デート

よりも捜査協力にエネルギーが向いているのだった。

「ねえ・・・蘭、ちょっと頼みがあるんだけど・・・」園子がワケありのウインクをした。

「テスト対策のノートでしょ・・・また？園子・・・」すぐに察した蘭がわざと言った。

「だって・・・自分で作るよりも蘭のノート見た方が分かり易いでしょ・・・」

「もう、園子ったら・・・」おきまりの口癖をつぶやきながらも、蘭は自分の鞆を開けに

行った。とてつもない衝撃からようやく解放されたサンドバックだった。が、すぐに後輩

達によって次の災難が始まるのだった。蘭と園子は連れだって部屋に入っていた。

「いやー蘭様、助かります！」園子は戯けてつぶやいた。

「いいよ、私だって園子に色々と助けて貰ってるし・・・」蘭も笑みを返した。

「そうだった・・・」

「あ、そうだ、ノート・・・！」鞆を開けて手早く中をチェックしていた蘭が思い出したように叫んだ。

「な、何？」目を丸くする園子。

「新一・・・」

「新・・・ああ！工藤君がどしたの？」

「実は園子・・・新一がね・・・」

『明日までには返すからよ、ノート借りとくぜ・・・』

『ちょ、ちよつと新一・・・』

『わりっ・・・今、読んてる推理小説がイイとこでさ・・・それどころじゃなくつてよ！』

『て言うか・・・！』

『サンキュー蘭！部活頑張れよぉー！！』

『もう、馬鹿っ！』

蘭の脳裏を一連の会話が蘇った。

「えーじゃあノートは今、工藤君のところなわけえ・・・」園子が言った。

「ごめん・・・園子！」蘭が片手拝みでウィンクした。

「いーよー蘭、あんたのせいじゃないし・・・まあこついつのは早い

モン勝ちだしね。」

サバサバと園子が言った。

「それに、愛しの亭主からの頼みとあっちゃあねえ・・・」

「違うよ、園子ったら・・・意地悪！」蘭は真っ赤になった。

「へへ、悪い悪い・・・」園子は新一の事になるとたんに不器用になる蘭をからかうのが

好きだった。ちよつと意地の悪い趣味だが、それも親友ならではの思っていたし、蘭に

しても、からかわれつつも、どこか受け入れているところがあつた。自分がもつと

新一に対して積極的になれば・・・という心のもどかしさを、親友が代弁してくれて
いるように感じていたのかもしれない。

「と、ともかく・・・ノートどうしよう？私、新一の家に行つてノート取り返してこよう

か？明日は休日だし、今日中に新一にはノート写させて、明日園子の家に届けてもいいよ。」

「え、いいよーわざわざ・・・それに蘭、明日は空手教室の少年部の合宿手伝いじゃなかった？」

「あ、そうか！園子、よく覚えてたね・・・」

「自分の事は覚えてないけど、人の予定とかつて不思議と覚えてたりしない・・・」

「うん、あるある・・・うちなんて、お父さんがあんなだから大変なのよ・・・」蘭は、依頼者と会う約束をしておきながら、競馬の予想に夢中で忘れていた小五郎に呆れている姿を思い出しながら頷いた。

「ま、そんなわけで・・・あたしはあたしで明日はお父様が主催するチャリティーパーティにホストの一人として参加しないといけないし・・・娘だからってしょうがないけどさ！」園子はちよつと不満そうにつぶやいた。

「そっかー財閥ご令嬢様も気苦労が絶えないよねえ・・・」

「ま、仕方ないわさ・・・誰にだって気苦労はあるもんね・・・」二人は顔を見合わせて頷きあった。こつという時に親友というのは、言葉以上に伝わるモノがあった。

「じゃあ蘭、合宿頑張つてね・・・それともし亭主に会ったら・・・」

「亭主じゃないって！」言い返す蘭の言葉に少しだけ何時も違う寂しさがあった。

『んっ？』園子はすぐに反応した。いつもならムキになって言い返す蘭の言葉に、ちよつと含むものを感じていた。

「蘭、工藤君と何かあったの？また喧嘩？」園子は少しだけ声の調子を落として囁いた。

「うつん・・・て言うか、喧嘩以前の話・・・あいつさ、本当は・・・」
蘭はちよつとうつむいた。

『蘭・・・』園子は同じ年ながら、ちよつとお姉さんのような気持ちになつて、いつもは気丈な親友の肩を抱いた。

「どれ、お姉さんに全部、話してみ！」園子は少し戯けながら優しく言つた。

「もう、園子つたら・・・」親友の優しさを受けて、蘭は心に温かいものが染み込んでくるのを感じていた。それから蘭は今朝の出来事やそれに関しての思いをとつとつと話した。園子は頷いたり、笑つたり、蘭のふくれっ面に同意の表情を浮かべたりしながら聞いていた。

「・・・というわけ！さっきのノートのこともそうだし、ラブレターとか私に見せつけて自慢なんかしちゃつて・・・結局、新一は私のこと、扱いやすい幼馴染みってくらいにしか思つてないんじゃないかって思つて・・・」こうしてサンドバックにぶついても晴れなかつた心のわだかまりを、蘭は園子に全て吐き出していた。

「うーん、幼馴染みっていうのも、色々とメリット・デメリットがあるってことだね・・・」
思わずニュース解説員のような感想を述べつつ嘆息した。

「私なんて、そんな幼馴染みもいなかったし、蘭と工藤君の関係を

見てて、時々羨ましくなってるさ・・だからからかったりもするんだけど・・」園子はちょっと寂しげな笑顔で言った。

「そ、園子・・」蘭は思わず園子を見つめた。

「蘭、あんたと工藤君・・本人達がどう思ってるか、なんてあたしや保証できないけど、端からみてりゃ、あんた達・・すっごくイイ感じだよ！」園子は確信の笑みを浮かべて言ってやった。

「園子・・あ、ありがと・・」蘭は親友の言葉に照れながら答えた。そして同時に自分が少し

主観的な結論に陥りすぎていることを、園子のお陰で気づかされた思いだった。気恥ずかしさと共に、親友の深い思いやりを感じて目を潤ませた。園子もちよっと照れて頷き返した。

「そうだ、蘭！イイこと思いついた！」園子が叫んだ。いたずらっ子の目になっている。

「な、何・・園子？」蘭はびっくりして目をこすった。

「デートよ・・作戦よ！」園子は思いつくままに言いながら、言葉を組み立てていた。

「え、な、何？どういうこと？」蘭にはまださっぱり分からない。

「だから・・工藤君をデートに誘うのよ！」

「だから、何で唐突にそうなるのよ・・第一、あいつがそんな・・」

『捜査が面白くってさ・・わりーな、蘭!』そう言うに決まってる。蘭の脳裏に新一の毎度の口癖が蘇っていた。そもそもデート以前に二人の関係はそんなんじゃない・・蘭はずっと昔、まだ二人が幼かった頃が懐かしかった。あの頃はまだお互いが異性であることなんて、意識しなくても良かった。幼馴染みというだけで何時でも一緒、何でも一緒に出来た。でも、今は違う・・新一には新一の夢があり、目標がある。私はどうだろう・・？

「ねー蘭、聞いてる？」

「え、あ、ごめん・・園子」突然、園子の声が耳元に響いてきて、蘭は我に返った。

「デートって言い方が唐突だったかもしれないけど、ようするに工藤君の気持ちを確かめる妙案ってことよ!工藤君を遊園地に誘ってみるのよ・・」園子は一言一言を言い聞かせるように蘭に言った。まるで暗示をかけるように・・

「で、でも新一に断られたら?」園子の雰囲気飲まれるように、蘭は思わず本音を呟いた。

「そこはそれ・・作戦よ、工藤君には直球は駄目、だから今度の空手都大会、これを口実にするのよ、つまり優勝のご褒美ってこと!」園子は得意そうな表情

で畳み掛けた。

「ご褒美？」蘭は何となく分かりつつもまだぴんとこない。

「工藤君に約束させるのよ、もし私が都大会で優勝したらってね・・
だったら、工藤君も

デートじゃなくて、ご褒美って感じたから、割と気楽に受けられる
でしょ。」

「あ、なるほど・・」今度は蘭にもぴんときた。確かにデートって
言えば違和感があるけど、
それだったら、私にも自然に言えそうな気がする・・蘭は納得の表
情で頷いた。

「ね、ナイスなアイデアでしょ！」園子は蘭の表情に大満足の体だ
った。何よりも親友が
心から笑顔を浮かべているのが嬉しかった。

「園子・・」蘭は今更ながら思い出したように照れていた。

「よしよし・・蘭！」豪快に笑いながら、わざとらしく蘭の背中を
叩くと園子は部室を出る
為に出入り口に向かった。蘭も慌てて後を追った。

「じゃあね、蘭、練習頑張つてよ・・作戦の要だぞ！」園子はウイ
ンクしながら微笑んだ。

「そつか・・そうだね・・頑張る！」蘭も頷いた。それから二人は
別れた。一人は道場へ、
一人は帰宅へ・・お互いに心に満たされるものを抱きながら・・

第二話（後書き）

周囲からは新蘭なのか？新園なのか？と聞かれます。

さて、どっちでしょう？

相変わらず遅筆ですが、気長にお付き合い下さいね。

第三話

Side Sonoko

「しっかし、幼馴染っていうのも結構複雑なもんだねえ・・・」部室で蘭と別れた後、園子は帝丹高校を後にした。途中何人かのクラスメイトと会い、軽口を叩きながら、やがて一人になつて繁華街を歩いていた。ウィンドウショッピングを楽しみながらも、頭の中では、親友のことを考えていた。蘭と工藤君・・・蘭のことを知らない下級生や帝丹以外の学生ならいざ知らず、二人のことを知っている者達にとっては、単なる幼馴染と割り切れるようなものではない。園子だけでなく、誰もがお似合いのカップルだと思っていた。二人にとつては、

お約束の口論も、傍から見れば痴話喧嘩みたいなもので、蘭の一番の親友たる園子としては、微笑ましいやら仲の良さが羨ましいやら・・・ついつい二人をからかいたくなるのである。

ただ、さっき聞いた蘭の思いを知ってしまったと、どうやらこの”幼馴染”というヤツは思っているほど単純なものではないのだ、と気がつかされた園子だった。

勿論、園子にも厳密に言えば幼馴染はいる。大賀財閥の跡取りである大賀真哉がそうであるが、

これはあくまでも園子の家庭環境から派生したものであつて、幼年期はともかく、今は良き友人という存在でしかない。鈴木財閥令嬢として生まれ育った園子にと

つては、お金や地位で手に入るものにそれ程の美意識を感じていなかった。寧ろお金では決して手に入れることが出来ないものに宝石の価値を感じていた。その意味で毛利蘭との出会いと友情は園子にとって、鈴木財閥の力に頼ることなく手にし、大切に育んできたダイヤモンドにも勝る宝石なのである。

「そう考えてみると、昔はともかく、今は私の方が工藤君よりも蘭のことを深く分かって
いるってことじゃない!!」園子はちょっと誇らしい気持ちになった。それから、今度は発想を変えて、工藤新一のことを考えてみた。

工藤新一・・・言わずと知れた高校生探偵!まだ学生なのに父親譲りとも言われている卓越した
推理力で、既に幾多の事件解決に協力し、今や”日本警察の救世主”とまでもてはやされる存在
であった。おまけにサッカーの実力と才能は超高校級・・・本人さえその気なら国立競技場の主役
でいられたにも関わらずさっさと身を引くというこれまたニクいマネをして、サッカー関係者
だけでなく、多くのサッカーファン、特に女性ファンを泣かせたものである。

文武両道を目指しているのは、彼が敬愛するシャーロック・ホームズの影響を多分に受けている
からだ。蘭の傍にいて新一のシャーロックアンブリにつき合わされてきた園子にとっては、
耳タコのエピソードばかりである。それでも蘭は幼馴染で想い人の

せいだろっ、ぶつぶつ言った
リジト目で睨んだりはそのものの、話自体しつかりと聞いていると
ころは流石である。

「そー言えばあたし、工藤君のことを一度も異性として意識したこ
とがなかったわね・・・」

ふと園子は気がついた。それは工藤新一には毛利蘭というパートナ
ーが決まっている、という
前提でしか見たことがなかったからだ。確かに新一は誰が見てもハ
ンサムで格好よく頭脳明晰、
少々キザで目立ちたがり屋なのが玉にキズだったが、それもまた彼
らしい魅力と言えなくも
ない。学校の内外に多くのファンがいるのも無理ないことであつた。
ただ、園子のように、
なまじ新一を間近で、しかも蘭の幼馴染として客観的に見慣れてい
ると、そうした魅力以外の
実像も色々と見えてくるものである。園子が何時も思つのはただ一
つ・・・

『口さえ開かなければ本当に貴公子なんだけどねえ・・・』

新一の声を聞いているだけでも幸せかもしれない蘭と違い、明けて
も暮れても推理小説の話や
事件についての推理話やトリックを見破ったことなどを話し続ける
のである。聞かされるほう
はたまったものではない。だからそういう時には、ファッションや
ら恋愛ネタなど、思いつき
新一がついていけない話題を振り、強引に話の腰を折るのである。
ある意味では新一の天敵とも

言えるかもしれない。

「ま、結局あたし的にはどうでもいいけど蘭には幸せになって欲しいし・・・あとは工藤君の本心が問題よね！」

そんなことを考えているうちに、通りの角にある本屋が見えてきた。ここは比較的に長時間の

立ち読みがし易いので、学生達に人気のある書店である。専門書から文庫本、雑誌まで充実して

いる。園子は明日のパーティーで着る為のドレスのセレクトやアクセサリーなどの流行を軽く

チェックしておく積りであった。やがて自動ドアの前に立とうとした時、向こうの角から

曲がってきた学生とドアの前でバッタリと鉢合わせた。

「あっ！」

「あ・・・！」

二人は同時に声を漏らした・・・偶然とは言え、お互いに面識があったからだ。

「工藤君・・・！？」

第三話（後書き）

そろそろペースをあげていききたいですね。
頑張ります。

第四話

side Shinichi

部活に出る直前の蘭からテスト対策のノートを強引に借りて、試験勉強を大幅に短縮出来る

めども立ち、新一は意気揚々と警視庁に向かった。目指すは警視庁捜査一課、勿論目的は

目暮警部のところである。都内でおこる数多くの殺人事件の捜査を手がける敏腕警部と言われて

いるが、実は過去に迷宮入りになりそうな事件を、彼がまだ新米刑事だった頃からの付き合い

で、新一の父親であり、高名な推理小説家でもある工藤優作に、度々助けられていることは意外

と知られていない。新一同様、シャーロック・ホームズを尊敬している優作は、彼自らが立ち

回る必要のある特殊な事件を覗いてホームズ同様、手柄を警察に譲ってきたからである。

そんな優作も現在は米国で執筆活動をしており、以前のように気軽に助勢を頼めない状況では

あったが、そこで一躍脚光を浴びてきたのが、高校生探偵としてその名も知れた工藤新一という

わけである。父親譲りの推理力によって次々と難事件を解決・・・まさに目暮達にとっても有難い

話だった。ただ、父親と違うのは、新一がかなりの目立ちたがり屋なので警視庁に手柄を譲る・・・

というよりも、自身の推理ショーをその場で展開してしまうのがやや玉にキズであった。とは

言えメディアというものは常にセンセーショナルな話題を求めているものである。

”平成のホームズ”

”日本警察の救世主”

こうして高校生探偵・工藤新一の名声はあっという間に不動のものとなったわけであつた。

はたして目暮は一課にいた。新一は勝手知つたる何とやら・・・で、気軽に部屋に入つていった。

刑事達もすっかり顔馴染みで、目暮の部下で、一番年齢も経験も若い高木刑事などは、新一の実力を知っているだけに、どちらが刑事が分からないような恐縮した態度で出迎えてくれた。

「ちわつす・・・高木刑事！」新一も軽く会釈した。

「く、工藤君・・・お疲れ様です・・・お茶、飲む？」つい後輩のようなノリで受けてしまう高木。

「高木！！」目暮の呆れ気味の怒声が飛ぶ。

「こんにちは、目暮警部！」今度は凜々しい声と態度で新一は声をかけた。

「おお、新一君、先日は助かったよ・・・君のお陰でな！」目暮は優しい声で目の前の高校生に深々と頭を下げた。目暮は良い意味での大人であつて、相手が年下

であれ、また仮に自分の発想

や経験則とは異なる意見やアドバイスであつたとしても、きちんとその違いに耳を貸し、自身の

間違いや思い違いには素直にそれを認め、柔軟に対応するという美德の持ち主だつた。だから

こそ、組織人としても階級の下上に関係なく信頼と尊敬を受け、優作や新一などの適切な助言を

基に最善たる指示を即断し、実行することが出来た。かくして目暮もまた多くの難事件を解決し

名刑事と称されているのである。

もちろん新一もそんな目暮警部を敬愛し、父親同様に全幅の信頼を寄せていた。

「恐縮です・・警部！」目暮とこうして会話を交わす時には、実の親子のようでもあつた。高木

にはそれが少々羨ましい。自分も早く一人前の刑事になって工藤君とは言わないまでも、警部の

お役に立つて褒めてもらいたいものだと考えていた。新一の存在は良い意味で目暮の部下達にも刺激を与えていたのである。

「で、警部、今日は・・」新一が話を切り出そうとした時・・

「いや、工藤君、今日は特に君に力を借りるような事件はないよ・・

」目暮はやや苦笑しつつ

新一の言葉を制した。

「それは残念・・というのは不謹慎ですね！」新一は品のいい微笑で応えた。

「まあ、そういうことだ・・・実際、最近は灰色の脳細胞が必要な事件よりも、単純で凶悪な銃犯罪や猟奇殺人が多くてね・・・犯人探しよりも、犯人の口から出る動機を聞くのが苦痛だよ、あまりにも陰惨な事件が多くてな。」目暮はやや肩を落として呟いた。思えば多くの殺人事件を手がけ、殺された者への哀悼、残された者の苦しみ、そして殺人を犯した者への怒りや憎しみを抑えながら法によって報いや償いを受けさせるしかない、そんな重荷を目暮は背負ってきていた。それは推理ショーによって探偵達が脚光を浴びる瞬間とは明らかに異なる重い十字架であつた。警察は被害者とその家族、加害者とその家族・・全く正反對の立場にある存在の間に立って、犯罪によって失われた人生と残された者のこれからの人生に少しでも希望の光が灯る道を模索しなければならないのである。事件の公判やその判決が双方にとって納得の行くものであることは稀なのだから・・

「分かりました・・警部、ではまた何時でも声をかけてください。」そんな目暮の心の痛みを少し感じながら、新一は丁寧に頭を下げると、課に残っていた刑事達にも会釈をして部屋を出ていった。

「警部・・工藤君って本当に高校生には見えませんよね・・大人だなあ・・」高木が嘆息した。

「いや、彼はまだ高校生には違いない・・ただ！」

「ただ・・・？」

「名探偵だよ・・・彼は！」新一が出て行った戸口を見ながら呟く目暮の顔は、実の父親のように誇らしげだった。

「そ、そうですよね・・・」慌てて頷く高木刑事。

「さあ、探偵じゃない我々は刑事の職務に精励するぞ！」

「はい！警部！！」

それから目暮は人前で片時も脱いだことのない愛用の帽子のツバを少し目深に被り直すと、高木を伴って現場に向かった。

「さてと・・・灰色の脳細胞はお休みさせるとして・・・ちょっと勉強強していくとするか！」

警視庁を出た新一は通りを抜けて本屋に向かっていった。お勉強といっても勿論、学業の本が目的

ではない・・・犯罪解決に役立つ為の資料を求めて本屋通いのことである。新一の自宅には、父親

の代からコレクションされている古今東西の犯罪に関する資料や推理小説の類が充実しており、

図書館顔負けの様相を呈していたが、それでも資料というものは次々と新刊が出るものである。

特に昨今の犯罪は、目暮警部も言っていたことだが、従来のものと

は異なる猟奇犯罪や銃犯罪

も多く、そうした新しい事件形態への頭脳や心理面の対応は、探偵には常に欠かせない基礎運動の

ようなものだとし新一は考えていた。この辺りの鋭敏な感覚は流石に父親譲りのものがあり、

見事な徹底ぶりであった。

あの角を曲がると本屋の入り口がある。本屋が近づくと新一は本能的に早足になっていた。今日は

既に目当ての本が幾つかあるので、一刻も早く手に取って読んでみたいのである。やがて彼は

サッカーのステップのような軽やかさで角を曲がった・・・と、その時、自動ドアの前でばったりと

女子高生と鉢合わせた。

「あ・・・！」

「あっ！」

二人は同時に声を漏らした。偶然とはいえ、お互いに面識があったからだ・・・

「げ、園子・・・！？」

第四話（後書き）

次回より、いよいよ物語が展開し始めます。

新一と園子、偶然の遭遇、その行方は・・・！？

楽しみにして下さいの方がおられたらことうご期待！

第五話

Shinichi x Sonoko side A

「げ・・！とは何よ、げっ、とは！？」園子は反射的に声を荒げた。蘭のことではあるが、

さっきまで新一のことを色々と考えていただけに、この予想もしなかった新一との遭遇で

一瞬言葉を失った園子だった。が、新一のある意味新一らしいとも言える”対・園子”

リアクションに、思わず攻撃的な言葉が口について出ていた。

「い、いや・・」当の新一は新一で、まさかこんなところでバツタリと会おうなんて思っ

てもみなかったが、よくよく考えてみると、この園子との遭遇は願ってもないことだった。

蘭の本心を知るために園子とコンタクトを取る、というのが基本線だったことを思い出して

いた。ここは少々園子の機嫌を取っておく必要がありそうだ。

「わりい！こんなところではったり会うなんて思わねーからさ・・」

新一は無意識のうちに、

何時も自分のファン達に見せるようなクールな笑顔を振りまいて、ぶんむくれている園子の

顔を見つめた。

「な、何よ・・！？」新一の思惑を知らない園子としては、僅かな時間の中で、露骨な手の

ひら返しの態度にちよっと戸惑いつつも、やはりそこは年頃のレデ

イーである。新一のこぼれる
ような微笑に一瞬ドキツとしたことは否定できなかった。

『これが噂の工藤新一スマイルね・ファン共がきゃーきゃー言うのも分かるわ。』日頃は
蘭と一緒にいるため、こうした新一のリアクションを間近でみるのは初めてである。しかも
それが自分だけに向けられているのだからまあ悪い気はしない。

「あまりにも出し抜けだったもんだからよ、妙なこと口走っちゃった、スマネ・・・！」園子の
表情の変化をすばやく観察しつつ、新一は愛想良く畳み掛けた。この辺りは見事に場馴れして
いるという感じで、園子もいつの間にか雰囲気呑まれていた。つられて笑顔が戻っている。

「そうね・・・私だって驚いたわよ！まさか本当に工藤君が目の前に現れるなんてね・・・」
何故かちよつと照れながら応える園子だった。だが、これは本心である。昨日の今日という
言葉もあるが、それどころか新一が現れたのはまさに今の今なのだから・・・

「ん？本当に・・・って？」そんな園子の事情が分からない新一は訝しげに尋ねた。そう切り
出しながらも反射的に言葉の持つ背景を色々と推理し始めていた。園子の言葉からすると、
どうやらさつきまで俺のことを噂していたか、考えていたか？噂しているとすれば、勿論
相手は蘭だろう・・・だが、今この場に蘭がないということは蘭は

まだ部活をしている筈、

つまりは何か俺のことについて考えていたことになるな・・・ま、これまでのことから、

園子が俺について考えているとすれば、親友である蘭と関係あることだろうな・・・

「い、いやまあ・・・ついさっきまで蘭と工藤君のこと話してたもんだから・・・別に大したことじゃないわよ！」園子は自分の言葉を不意に指摘され、何となく本音半分、ごまかし

半分で応えていた。

『工藤君の馬鹿！急に現れるから心の準備が出来てなかったじゃないの・・・！』

『やっぱりな・・・蘭のやつ、園子に何を話したのやら・・・』

「へ、へーなるほどね！」とりあえず納得してみせる新一。

「そ、そうなの・・・！」慌てて頷く園子。

互いに思惑がある両者だったが、それだけにこの出し抜けの遭遇はややぎこちない空気を

生んでいた。そのことに気がつき、新一はふうっと息を吐いて肩の力を抜いた。

「ところで園子・・・」

「な、何・・・？」

「とりあえずここは店先だし、中入るか？それとも・・・」

「それとも・・・？」

「偶然にしても、こうしてばったり会ったのもあれだから、茶一で
もしばきに行つか？」

「え、え・・・？」

出し抜けの提案ではあったが、この辺は微妙な呼吸で心理誘導の妙
が必要である。新一

が名探偵と称されるのには、こうした人心を掴む術をきちんと心得
ていることも大切な

要素であつた。新一は幼少時から父親譲りの洞察力、母親譲りの演
技力、幾多の著名な

名探偵の書から受け継がれた観察方法や心理掌握術などおよそ探偵
として必要なものは

徹底的に身に着け、またそれを日々磨いていた。灰色の頭脳だけで
はなく、サッカーや

スポーツを通じて様々に肉体を鍛錬することを怠らなかったのも、
新一が最も敬愛、いや

崇拜しているシャーロック・ホームズの探偵観に倣つてのものだ。
平成のシャーロック・

ホームズは一夜にしてならず！というわけである。

「どうする、園子？」新一は優しく訊いた。

「う、うん・・・」新一の笑顔に思わず頷く園子。無意識のうちに顔
を少し赤らめていた。

「うん・・・ってどっちだよ？」微笑しながら園子を見る新一。中々役者である・・・

「いいわね、茶・・・」何となく新一ペースで空気が流れているのを感じる園子だったが、

同時にそれはそれで悪くないとも思っていた。結果的には新一の本心を知るチャンス到来

なわけである。勿論、親友である蘭の為に、だ！

『ごめんね・・・蘭、あんたを差し置いて・・・でも親友の園子様が必ず工藤君の本心を聞き出してきてあげるからね、待ってて！蘭！！』そんなふうに考えると、少しテンションも

上がってくる。まるで女スパイにでもなったようなノリの園子であった。

『蘭・・・これはあくまでもおめーのために行くんだからな・・・誤解すんじゃないぞ！』

新一は新一で蘭への義理堅さからか、妙な罪悪感も多少感じていた。そんなこととは露知

らず空手の猛稽古に励んでいる蘭だったが・・・

とにもかくにも新一と園子はそれぞれ当初の目的であった本屋を背を向けて、二人連れ立って

歩いていった。繁華街だけに、目指す喫茶店は割りと近くに数軒ある。適当に歩いていれば

その内に見えてくるだろう。新一と園子はややぎこちなく雑談をしながら歩いていた。それ

だけに、傍から見れば、ちょっと初々しいカップルのようには見えなくも無い。

「ところで、おめー、本屋の用事は良かったのか？」

「いいの、今月発売のファッション誌をチェックしよっかな、て思っただけだから・・・」

「ふーん、ま、お嬢様だしな、おめーは・・・」分かったような分からないような納得の仕方をする新一。

「あら、ファッション誌くらい、女の子なら誰でもチェックするわよ！」呆れたように切り返す園子。

「蘭もかよ？あいつ空手胴着が一番似合うからなあ・・・」園子とはちかく、新一には蘭が熱心にファッション誌を読む姿が想像できない。

「それ、蘭に言ってやる！多分ぶつとばされるわね・・・」にやりと笑う園子。

「わ、今のは冗談だぜ・・・」マジで背筋がぞつとする新一。蘭が実際に鉄拳でブロック塀を粉砕するシーンを見たことのある新一にしてみれば洒落で済む話ではないのである。

「へー冗談には聞こえなかったけどなあ・・・」イタズラっぽい目つきで突っ込む園子。

「今のはマジで御内密に・・・園子さま」園子のノリに合わせて新一

も返す。

「じゃ、今日は工藤君の奢りね、きまり！」間髪をいれず園子が断言した。

「え？あ・・はい！」この種の展開になれば新一の負けである。新一としても、自分から誘った手前、奢りは覚悟していたし、割とあっさり承諾した。まあこれで園子の機嫌が良くなって話しが進め易くなるのであれば損は無いというものだ。

「よろしい！」嬉しそうに呟くと、園子は大きな目で、にこっと笑みを見せた。

『え・・なんだ、可愛い・・じゃん！』今度は新一が少しどきつとする番だった。日頃、蘭のことしか見えていない新一だったが、実際、園子は可愛らしさとしては蘭に勝るとも劣らない魅力を持った少女なのである。今こうして蘭を抜きに一对一で見してみると、園子の笑顔も中々悪くない・・新一は一瞬、園子の笑顔に魅せられていた。

「で、工藤君は・・？」

「え？あ、俺・・？」僅かながら思考の海に沈んでいた新一の耳元に園子の声が響き、

新一は慌てて我に帰ったが、園子の質問は耳に入っていなかった。

「だから本屋よ！工藤君も何かチェックするもんあったんじゃない

の？」新一らしくない
反応にちよつと驚きながら園子は聞き直した。そういえばさっきの
表情もいつものキザで
クールなものではなく、まるで少年のようなあどけない顔つきだっ
たのも印象的だった。

「あ、俺？俺はちよつと犯罪学のお勉強ってヤツさ、防弾工学研究
所が出した文献が発売
されててな・・・これがすげーんだ！銃の基礎知識から弾丸の種類と
構造まで詳細に分析、
解説してんだ！チェックしておかねーとな。」先ほど一瞬見せた少
年のような表情はどこ
やら・・・あつという間の名探偵モードで、良くぞ訊いてくれました、
とばかりに思わず
解説の言葉に熱がこもる新一だったが、当然ながら園子のリアクシ
ョンは薄い。

「そんなもん分かると何か意味があるわけ？」やや引き気味に園子
が訊いた。

「あるに決まってるんだろ！現代はなあ・・・犯罪の広域化、スピード
化が進んでんだよ！
近代犯罪に対応するにはな、迅速・的確な初動捜査がモノを言うん
だ！探偵としては、
初動捜査の段階で優れた観察力と分析力と判断力が要求されるって
わけだ！その為には、
常日頃からより正確な判断材料が必要になるってことなんだぜ・・・」
新一の熱弁は次第に
力がこもってきた。

『はあゝ余計なこと聞かなくや良かった・・・』園子は自ら墓穴を掘ったことを自覚した

が、後悔先に立たず・・・こうなったら強引に話の腰を折るしかない。

「・・・で、つまりよ・・・」新一の解説はまだまだ続いていた。

「ね、ねえ・・・工藤君、あった、喫茶店！・・・あの店にしようよ！」演説の途中だった

が、そんなことを気にしてはいられない！園子は唐突に声を上げて新一の言葉を遮ると、

道路反対側の通りに見えた喫茶店を指差した。

「・・・あ、そうだな、そこにすつか！」一瞬不満そうな表情を浮かべた新一だったが、

喫茶店と聞いて本来の目的を思い出し、園子の指差した方向に目を向けて頷いた。

「あら、信号変わっちゃうわね・・・」横断歩道を渡ろうと歩き出した園子だったが、タイミング悪く歩行者信号が点滅を始めた。踏み出した右足を戻そうとする園子。

「よし、走ろうぜ、園子！」動きを止めようとした園子とは反対に、新一は掛け声と同時に身体を車道に踊らせようとしていた。そして少し振り返りながら後に続くよう園子に目で促した。

「ちょ、く、工藤君・・・きゃあ・・・!？」園子は思わず叫んでいた。止めようとした

歩みとは裏腹に、新一につられて歩き出そうとする意識とが交錯してバランスを崩してしまい、その場につんのめりそうだった。が、実際にはそうならなかった。よろけそうになった園子の身体は、その瞬間、向こうから伸びてきた腕によって支えられ、何事も無かったかのように元の通り立ち上がっていた。

「え？あ・・・！」一瞬自分の身に起きたことが分からなかった園子だったが、すっと伸びた右腕の先は、もう一つの腕と繋がっていた。そしてその腕の先にあるちよつと照れた表情の新一と目線がぶつかった。

『工藤君・・・私を支えてくれたんだ・・・』漸く園子は先ほどの瞬間を思い出した。

「大丈夫かよ・・・園子！」新一の声にはちよつとだけ感情的な優しさがこもっていた。

「う、うん！あ、ありがと・・・工藤くん・・・」消え入りそうな小さな声で頷く園子。

「危なかったなあ・・・」新一はいつもと違う園子の少女っぽい仕草にちよつと戸惑いつつも頷いた。二人の右手と左手はしっかりと繋がっていたが、新一も園子もその事を忘れていた。その間に歩行者信号はもう赤になっていた。

「ごめん・・・ん！？て言うか、工藤君が急に走り出すからでしょ

「！！馬鹿・・・」園子はふと

我に帰って叫んだ。そう、よくよく考えてみると、さっきは突然、新一が信号の点滅中に走り出そうとした為に、慌てて転びそうになったのである。つまり新一が原因ということだ。

「いや・・・ワリいワリい！」新一は素直に頭を下げた。

「もう・・・危ないのは工藤君でしょ！」園子は追い討ちをかけた。

「すまね！信号点滅を見ると、ついホイッスル直前のゴールシーンとだぶつちまって・・・たまにそんな気持ちにならねー？」新一はいたずらっ子のような笑顔で言った。

「ならん、ならん！」相変わらずジト目で睨む園子だったが、新一と視線がぶつかってしまっ

と、不覚にも笑顔がこぼれてしまった。それから二人はどちらともなく笑った。笑い合いながら、

この時、新一と園子は初めてささやかな共感を覚えていた。

「あ！」

「あ・・・」

その時、二人はどちらともなく声を出した。もう一つ忘れていたことに気がついたからである。

「・・・何時まで握ってんのよ、手！」

「それは、こっちのせりふだぜ！」

それから二人はややばつが悪そうにつないだ手を離した。離れた後で園子は何となく顔を赤らめて、新一の顔をそつと見た。新一はさりげなく視線をそらして横断歩道の向こうを見た。二人の間には少しきまずい、けれどもちよつと温かい雰囲気満ちようとしていた。二人はお互いの顔をまっすぐ見ることはなかったが、不思議とお互いが隣に立っているという意識を感じていた。やがて、歩行者信号が再び青に変わった。

「お、変わったぜ・・・信号！」新一はほつとしたように言った。

「ホント・・・じゃ、渡りましょ！」園子もつられて答えた。

それから二人はまた並んで歩き出した。その歩みは先刻までと違い、随分と自然な足取りだった。勿論二人ともそんなことは気がついてさえいなかった。

「それにしても・・・信号が点滅したたら無理して渡っちゃ駄目よ！」

「へいへい・・・」

「ちゃんと聞いている？工藤君！！」

「へーへー・・・」

それから数分後、近くの喫茶店に新一と園子の姿があった。

第五話（後書き）

いつも本書を読んで下さっている読者の皆様、どうも有難うございます。本来は遅筆の人ですが、多くの方に読んで頂き、自然と執筆ペースも上がってきました。

次回第六話「Shinichi x Sonoko side B

」をお送りする

予定です。楽しみにしている方がおられましたら、こうご期待！（と言うか、新一 x 園子シーン、楽しみという方は果たしているのでしょうか？私は書いていて意外と楽しくなってきましたのですが・・・）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8743b/>

あの日

2010年10月9日23時08分発行